◎くにまもりの提言㊽◎

皇居勤労奉仕から見る 皇室と国民のつながり

西脇（にしわき） 美穂（みほ）
（しがく総合研究所）

令和8年は、昭和元年から満100年の節目にあたる。戦後の日本が焼け跡から立ち上がることができた背景には、国民一人ひとりの努力はもちろんのこと、皇室と国民が互いに心を寄せ合う関係があったことも忘れてはならない。現在、皇族数の確保や皇室制度の将来について、国会や政府で議論が進められている。皇室がこれからも国民とともにあり続けるために、私たち国民は何を考え、何ができるのか。皇居勤労奉仕の歩みを通じて、そのことを考えてみたい。

皇室の伝統

皇室は、第126代の今上陛下まで連綿と続いてきた。その長い歴史の中で、皇室の伝統について、上皇陛下も今上陛下も折に触れてお言葉を述べられている。それは「皇室は、国民の幸福を常に願い、国民と苦楽を共にしながら務めを果たす」存在であることだ。日本の皇室は長い歴史の中で国民の安寧を祈り、国民の喜びや悲しみに心を寄せる存在であり続けてきた。国民の幸せを祈り、国民とともに歩まれる存在である。

昭和天皇もまた、戦後、焼け野原となった日本の復興を深く願われた。宮殿が焼失した後も、宮殿の再建よりも国民の生活再建や国の復興を最優先し、ご自身は15年以上も御文庫（防空壕のこと）でお過ごしになられている。

また、昭和天皇は戦後の全国ご巡幸を通じて、焼け跡も残る中、国民一人ひとりを励まされた。敗戦によって誇りを失い、家族を失い、生活の基盤を失った人々に対して、昭和天皇は直接お声をかけられた。そのお姿は、多くの国民にとって、もう一度立ち上がる力となった。そこにはまさに、国民と苦楽を共にし、国民に心を寄せられる皇室のお姿があった。

皇室に心を寄せる国民

一方で、国民の側にも、戦後の混乱と貧しさの中にあってなお、天皇陛下をお支えしたいという真心があった。そのことを象徴するものが、昭和20年から始まった皇居勤労奉仕である。

現在、有志で集まった国民が皇居と赤坂御用地で除草、清掃、庭園作業などを行う皇居勤労奉仕が行われている。この皇居勤労奉仕が始まったのは、昭和20年、戦後間もない12月のこと。皇居周辺の土手や二重橋前の広場には雑草が生い茂り、照明灯は壊れ、清掃管理も行き届いていない状態。その荒れた状態を見た宮城県出身の青年が、郷里に帰った際、皇居の現状を仲間に話し、

「まことに相すまぬことだ、皇居外苑の草刈りをしたい」と、その思いから宮城県内の有志が上京し、当時の宮内省に勤労奉仕を願い出たことが、皇居勤労奉仕の始まりである。

終戦から3、4ヶ月しか経っておらず、すべてにおいて物資が不足し、上京するまでの乗車券の購入や、宿舎を確保するのも大変な時期。ましてや、占領軍に検挙されるかもしれない中、彼らは「皇室のために何かをしたい」という思いを胸に、決死の覚悟で上京したのである。その人数は63名であった。

奉仕は、宮内省のはからいで皇居外苑ではなく皇居内で、宮殿の焼け跡の散乱した礎石や瓦、レンガなどの片付けを3日間にわたって行った。

初日には、昭和天皇が奉仕団に会いたいと急遽お出ましになり、奉仕団とご会釈の場が設けられた。昭和天皇からは、「何とぞ国家再建のために、たゆまず精を出して努力して貰いたい」と励ましのお言葉があった。その後、突如奉仕団から君が代の合唱が湧きおこった。当時、占領軍の取り締まりが厳しく、君が代を口にすることさえ遠慮するような空気があった。その中で、奉仕団員たちは涙を流しながら歌っていたという。その様子をご覧になった昭和天皇は、君が代が歌い終わるまで足を止められていたと伝えられている。

これは、戦後もなお皇室に心を寄せた国民の姿である。第1回の奉仕をきっかけに、その後、全国各地から奉仕の願い出が相次ぎ、皇居勤労奉仕は今日まで続いている。

皇居勤労奉仕について、昭和天皇は、次の御製をお詠みになっている。

をちこちの　民のまゐきて　うれしくぞ
宮居のうちに　けふもまたあふ

〈あちらこちらの民がやってきて嬉しい
皇居の中で今日もまた会う〉

昭和天皇もまた、国民の奉仕の心を深くお喜びになっていたことが伝わってくる。国民が天皇を思い、天皇がその国民の心を受け止められる。戦後の日本は、国民が天皇を支え、天皇が国民を励ますという、相互の信頼関係の中で歩み出したのではないだろうか。

皇室の未来を支えるために

今、皇室存続の危機に直面している。皇族数の減少、皇室活動の将来、皇位継承をめぐる問題など、皇室がこれからも安定的に続いていくための議論が、国会や政府で進められている。

天皇陛下は、令和8年6月の記者会見で、皇族数の確保に向けて国会で行われていた議論について「国民の皆さんの理解が得られるものとなることを望んでおります」と述べられた。これはつまり皇室の将来をめぐる議論は、政府や政治家だけでなく、私たち国民も関心を寄せる必要があるということだ。

皇居勤労奉仕に参加した人々は、戦後の困難の中で、「皇室のために自分たちにできることは何か」を考え、行動した。その真心に対して、昭和天皇も深く心を寄せられていた。今の私たちも、皇室の歩みを学び、皇室の方々の声に耳を傾け、何ができるのかを考え、発信し、行動していくことが必要である。それこそが、皇室と国民のつながりを次の時代へ受け継いでいくための私たちの務めではないだろうか。

カレント年間購読はコチラ⇩